夕刊文化

こころの玉手箱

イーパーセル社長
北野　譲治

4

「私心捨て畏れず」進む勇気

四元義隆先生の語録集「常思親」

保険ディーラーを起業した頃に知遇を得た初老の男性に頼まれ、北鎌倉にある円覚寺の塔頭に自家用車で何度となくお連れした。そこでは、人生の師となる四元義隆先生が暮らしていた。初めてお会いした日に「常思親」という一冊の本を頂いた。

吉田松陰が家族に宛てた辞世の句「親思う　心にまさる親心　けふのおとずれ　何ときくらん」から題名を取られたのだろうか。四元先生の語録を書き留めたものだが、大切な宝物の一つとなった。

人生に悩むと、手垢で染まった常思親を手にとって今も昔と変わらずページをめくり、先生の言葉と何時間も格闘する。すると、その瞬間、胸にしみる言葉が浮き上がり不思議と力強く僕を励ましてくれる。そうやって予期なく現れる人生の高い壁を越えてきた。

人生に悩むと、今も昔と変わらずページをめくる

「吹毛常磨」は「君ね、平素から地金を磨きなさい。それが肝要だ」との言葉が突き刺さる。「無畏」については「君ね、自分をすべて捨て去った後に残る本能に従って生きよ」と教えてくれる。若者よ、真っすぐに進めと勇気を与えてくれる。

「一大事と申すは今日只今の心也」は緩む気持ちを戒める。「今日一日を始めとし、終わりとする。昨日までの自分は、今日一日を生き抜くための準備にすぎない。昨日の過ちを悔いて引きずるな、いまだ来ない明日の夢におぼれるな」との意味だ。

インターネット黎明期の1996年、イーパーセルはネット上の国際物流という事業のコンセプトを世に問うた。時代の最先端を走る斬新なビジネスモデルが世の中の産業構造をガラリと変えるはずだった。だが思い通りにいかないのは世の常である。

主要株主から「再建は君にしかできない」と半ば強引に背中を押されて、04年11月に社長に就任することとなった。人生で最もつらく厳しかった。経営判断は「私心を捨てろ」、一気に攻めるときは「畏れる無かれ」と先生の言葉がどん底の僕を励まし続けてくれた。珠玉の言葉があればこそ、今の僕があり、会社の繁栄と成功があると思う。